

■「やることをやるだけ」。北海学園大が本道勢初勝利へ自信

2009年から始まり、新型コロナウイルス禍での中止を除いて今年で16回目を迎える全日本大学選手権で、北海道代表の北海学園大が北海道勢として待望の初勝利に燃えている。1回戦は11月8日、金沢市営球技場で行われ、対戦相手は北陸学生リーグ代表の福井県立大。北陸勢とは初顔合わせとなるが、数的優位に加えてゴールデンベアースは攻守とも絶好調。「やることをやるだけ」という高木幸樹HCの言葉には自信がみなぎっている。

北海学園大は2年連続4回目の全日本挑戦。昨年は中京大（東海地区代表）に苦杯を喫したが、この敗戦を糧にチームは奮起した。10月26日に終了した第51回北海道学生選手権（北海道学生リーグ）は5戦全勝で2年連続10回目の優勝を果たし、雪辱の舞台に帰ってきた。リーグ戦では総得点が216点、総失点はわずかに38点。1試合平均は43.2得点、7.6失点で、攻守とも抜群の安定感を見せた。ヤード数も、攻撃が5試合でラン997ヤード、パス888ヤードの計1885ヤードを獲得し、リーグトップ。対する守備はランで494ヤード、パスが475ヤード、計969ヤードの喪失。1試合平均では193.8ヤードに抑え込んだ。



今年のチームの特徴はタレントの豊富さだ。主将でもあるエースQBの成田滉佑（4年）が688ヤードを投げて11TD。ランではリーグ新人賞のRB北脇瑠依（1年）が385ヤード、5TD、RB加藤真之助（4年）が254ヤード、2TD、RB末広大貴（2年）が211ヤード、3TDと走り回った。レシーブではWR神林駿太（2年）が3

08ヤード、7TD、WR五十嵐勇星（2年）が252ヤード、2TD、WR福原柊太（1年）が159ヤード、3TDと伝統のパス攻撃を牽引した。

守備でも3インターセプトのLB岩上凌大（3年）、2インターセプトのDB野原寛生（4年）とDB齋藤颯（3年）、QBサックを決めたDL沖田悠爾（4年）と最前線から守備バックまで戦力が充実した。



チームは3日まで、北海学園清田グラウンドで最後の調整を行い、試合前々日の6日に金沢入りする。午前と午後の2部練習となった2日も、丹念にプレーの確認を繰り返した。高木HCは「福井県立大はラインが大きく、しっかりしたチームだが、自分たちが北海道でやったことを出し尽くすだけ。ミスをしないことが勝利のポイント」と自信をにじませた。

選手たちも意気込む。QB成田は「うちはスピードとテンポが持ち味。強みをしっかりと生かしたい」と、相手の大型ラインを苦しめない。「パスの学園大なので、ロングも決めたい」とも。全日本初挑戦のRB北脇も「自分の足を生かして2TDを狙う」と元気いっぱいだ。守備キャプテンのLB樫田裕丈（4年）は「北海道代表のプライドで勝つ。来年の開催権を持ち帰る」と気合十分だ。トレーナーの甲斐史彩（4年）も「選手にダイナミックではつらつとしたプレーをしてもらいたい。スタッフも全力でバックアップする」と必勝を誓った。

（広報委員 塚田博）